

石垣島に作ろうとしている自衛隊基地は「普通の駐屯地」ではない

その一 火種のあるところに置くミサイルの基地

2018年6月5日 FB ページに投稿



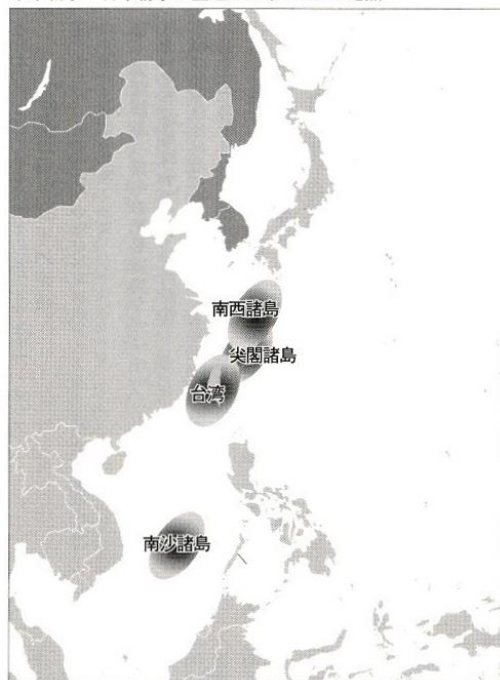
「自衛隊の基地はたくさんあるが、外国に攻撃されたものは一つもない。なのに、なぜ『標的になる』なんて言うの」と、不思議に思う方もいるでしょう。

でも、石垣島に基地が出来れば、実際に標的になる可能性が高いのです。それは、計画されているのが、普通の駐屯地（陸上自衛隊の基地）ではないからです。

なぜ普通でないか？その第一の理由は、日本の周辺でいちばん有事が起きやすい地域に作る基地だからです。ここでいう有事とは、戦争や武力衝突のことです。

写真の図をご覧ください。これは、元自衛隊最高幹部の一人である渡辺悦和さんの本「米中戦争 そのとき日本は」（講談社現代新書 2016年刊）に載っている図です。渡辺さんは東京大学出身で、陸上幕僚副長、陸自東部方面総監などを歴任し、現在はハーバード大学のアジアセンターで研究している、防衛畑のトップエリートです。

米中戦争・日中紛争が起きしやすい4つの地点



その人が、米中戦争・日中紛争の有事が起きやすい場所としてあげているのは、南シナ海の南沙諸島、台湾周辺、そして、東シナ海の尖閣諸島、南西諸島です。南西諸島といっても、有事になりやすいのは島ではなく、宮古海峡などの戦略的に重要な水路です。尖閣諸島、宮古海峡、そして台湾も、確かに石垣島に近いですね。

日本の国防の基本方針を定めたという「国家安全保障戦略について」や「防衛計画の大綱」（どちらも2013年12月閣議決定）も、同じようなことを書いています。そして、尖閣の接続水域を中国の原子力潜水艦が通過したり、宮古海峡の上を飛ぶ中国軍機に自衛隊機がスクランブルをかけたたりするたびに、防衛省関係者が、「ここではいつ有事になっても不思議はない」とコメントしています。防衛省周辺の人が言うだけなら「防衛予算を増やしたいから？」と勘ぐることもできますが、リベラルな研究者、評論家も、中国政府やアメリカ政府も、「どこが危ないかといえばこのあたり」という点では一致しています。

「有事になれば真っ先に標的になるのは軍事施設」は、軍事の常識です。旧日本軍が開戦と同時に奇襲攻撃をかけたのは、真珠湾のアメリカ太平洋艦隊の基地でした。米英軍が石垣島を空爆し、艦砲射撃を浴びせたのは、特攻機の発進基地である白保、平得、平喜名の軍用飛行場をつぶすためでした。

本土にたくさんある自衛隊基地が標的にならなかったのは、そこが有事にならなかったからです。それらは専守防衛の基地で、周辺に有事になりやすい地域もありませんでした。ですから、国連憲章に違反して日本本土に攻め込む外国が現れない限り、有事になることはなかったのです。

しかし、尖閣諸島や宮古海峡は、領有権や海峡通航権をめぐる緊張関係にあり、対立する双方が、国連憲章が認める「自衛権の発動」を掲げて武力行使する条件があります。そんな有事になりやすい地域に軍事基地を作るのは、上原秀政さんが言われるように、「火種のあるところに発火装置を持ち込む」ようなものです。火種のあるところでは、まず火種を解消するために、対話の努力を尽くすべきです。

ところが、あえて多くの人々が住む島に軍事基地を作るのは、専守防衛のためではありません。有事を想定し、それに勝つために地上からミサイルを発射して相手の艦隊を攻撃するためです。そうなれば標的となることは防衛省も織り込み済みで、防衛大綱の「島しょ防衛・奪回」の箇所には、「弾道ミサイル、巡航ミサイル等による攻撃に対して的確に対応する」と書いてあります。だから、計画されているのは、東シナ海有事に対応する前線基地です。本土のような普通の駐屯地ではありません。